
ショートショート パート1

春野天使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シヨートシヨート パート1

【Nコード】

N5919B

【作者名】

春野天使

【あらすじ】

交流サイトの掲示板の「即興小説」から、自分の作品だけを投稿してみました。千文字以内のシヨートシヨートストーリーです。

一、ダブルの幸せ 「合格」「紙幣」「自転車」(前書き)

三つのお題は、前に執筆した方が考えます。お題を考えていただいた方々、ありがとうございます！そして、楽しい企画を考えてくださった物書き魂さん、どうもありがとうございます。

一、ダブルの幸せ 「合格」「紙幣」「自転車」

「あつた〜！」

僕は思わずその場でジャンプする。東の空が白み始めてきた。吐く息も真つ白で凍えるように寒い。けれど、僕は嬉しさで寒さなんか感じない！

この喜びは、志望校に合格した時と同じくらい、いやそれ以上に大きかった。

僕は懐中電灯を消し、ピンセットで小さな紙切れをつまむと、ビール袋の中に入れた。

「これで全部拾ったぞ」

僕は大満足で、袋の中の紙切れを見つめる。小さな紙切れ……それは、大切な一万円札の最後の一切れだ。家に帰れば、ここ数日拾い集めた紙幣の紙切れがある。最後の一切れだけ、なかなか見つからなかった。紙幣の三分の二が残っていれば、新しいお札と交換出来るけど、僕は最後のひとかけらまで見つけたかった。

疲れた。もうこりごりだ。あんな宣言するんじゃないかった。僕は、フーと大きく息を吐いて自転車に乗る。

『もし、。。高校に合格したら、皆の前で一万円を紙吹雪にしてばらまいてやる！』

僕はクラスメイトの前で、大宣言してしまったのだった……。まさか、あの名門校に合格出来るとは考えてなかった。

「ま、いいか。志望校に合格出来て、一万円も元に戻ったんだし！」

僕は声を立てて笑うと、朝日が差し始める中、勢いよく自転車を漕ぎ出した。

一、ダブルの幸せ 「合格」「紙幣」「自転車」(後書き)

初めて「即興小説」に参加して書いた作品です。短くまとめるのって難しいですね。でも、三つのお題があると、発想が広がります。けど、せこい男の子です。でも、15の子にとって一万円は大金です。私にとっても大金です。^^;

二、初恋の彼 「自転車」「銅像」「マフラー」

あなたはいつものようにクールな眼差しで、じっと本に目を落としている。雪が降ってきそうなくらい寒いのに、いつもと同じように薄着ね……。

真面目で無口なあなた。でも、あなたはいつも私の側にいてくれて、私を置いてどこにも行かない。

私が振られた時も、ずっと側にいてくれた。泣きながらふられた彼のことを未練がましく話しても、嫌な顔もせずじっと私の話を聞いてくれた。

……本当に聞いてくれたのかな？ あの時もあなたはずーと本を読んでいたから、聞いてくれたかどうかは分からない。本当にあなたは本ばかり読む勉強好きなんだから。

でも、良い。毎日、自転車で会いに来るね。これ、あなたにプレゼントする。彼のために編んだんだけど、あなたにあげる。今度は、あなたのために編んであげるね。

私は自転車の籠から手編みのマフラーを取りだして、彼に巻いてあげた。

彼は出身小学校に建っている「二宮金次郎」の銅像……。二宮金次郎がある学校って少なくなったけど、ここにはまだあるものね。

銅像の彼は私の初恋の相手。ずっと、ずっとここにいて、どこにも行かないでね。

あとがき

六百文字以内の投稿が出来ないため、後書きをここに書かせていただきます。

「銅像」と言えば、あの偉大なる八十肇さんの銅像姿を思い浮かべてしまいますが（^^）、これは二宮金次郎さんの銅像です。着物姿で薪を背負い、熱心に本を読んでいる姿は有名です。最近、すっかり姿を見かけなくなりましたが、つい最近ある小学校で彼の姿を発見しました！ かなりちっちゃいタイプで、マフラーをかけたらほとんど身体が隠れてしまいそうでしたが。^^；

三、オムライスに込めた願い 「恥」「オムライス」「お日様」

「もー！ ダメでしょ、マー君！」

出張先の小さな食堂で、若いママが小さな男の子を叱っている。

「ケチャップでお絵かきしちゃダメっていつも言ってるでしょ」

男の子の前のテーブルには、オムライスが一つ。男の子はちっちゃな手でケチャップの容器を握ってる。

「やだ！ ボク、いつもオムライスにはお日様の絵を描くんだもん」

男の子のオムライスは、ケチャップで描いたお日様で真っ赤だ。

俺はちよつと恥ずかしい気持ちになりながらも、自分のテーブルの上のオムライスを見つめる。

三十過ぎてオムライスを注文するのもなんだが、俺は出張先では必ずオムライスを食べている。で、あの男の子と同じようにケチャップでお日様の絵を……。

苦笑いしながらも、俺はお日様の部分をスプーンですくって口に含む。うまい！ お日様のオムライスを食べると仕事も上手いく。恥ずかしくて妻には言えない、俺のげんかつぎだ。

あとがき

次回から六百文字以上千文字以内を目指します……。

そう言えば、昨日の夕飯は「オムライス」でした。最近のオムライスは、ライスを卵で巻くんじゃなくて、卵を上に乗せるだけっていうのが多いです。自分で作る時はその方が簡単ですね。でも、昨日はくると卵でくるんだオムライスを作ってみました！ なか

なか巻くのは難しいですよ。ライスを少な目にとすると良いですね。なんとか、綺麗に作れました。

ケチャップのお絵かきはしません。面倒です。

この作品はなんとなく思いつきました。レストランだと、ケチャップでお絵かきは出来ないと思うんで、小さな大衆食堂のイメージです。

四、優しい兄 「風邪」「鮭」「学校」

「ハックション！」

学校を出たとたん、私は大きくしゃみをした。見上げた空は冬模様。チラチラと粉雪が舞っていた。

私は足取りを速めて、家へと急ぐ。もうすぐ高校入試なのに、風邪なんてひいてられない！

「おかえりー」

家に帰ると大学生の兄がいた。学校はもう冬休み。家でゴロゴロしてるばかりだから、たまに鬱陶しく思う。

「ハックション！」

兄の目の前で、また、大きなくしゃみをした。

「あつ、お前風邪ひいたんじゃないかねえか？」

そう言いながら、兄は台所へ行く。

「来いよ。今から兄ちゃんがおいしいもん食わしてやる」

「いいもん？……」

私は胡散臭く思いながらも、風邪でだるくて言い返すのも面倒。素直に兄について行く。

「ジャーン！ どうぞ！」

私の目の前には、ドンブリに入った鮭茶漬けが置かれた。鮭フレークがたっぷりのお茶漬けは、兄の好物だ。

「これで風邪治るぞ」

「……？ 鮭茶漬けで風邪が治るなんて聞いたことないよ」

「治るつて。これ、兄ちゃんの愛情たっぷり茶漬けだから」

私は軽いため息をつきながら、兄の鮭茶漬けを食べてみる。割と美味しい。一緒にのったたくわんのお漬け物も良い感じ。

「兄ちゃんも鮭茶漬けで風邪治った」

私は温かいお茶漬けをサラサラと食べる。結構優しいところもあるじゃん。

「風邪って人にうつすと治るとも言うよな」

私はドンブリを置いて、パジャマ姿の兄を見る。兄は屈託のない顔をして、笑ってた。

「……」

兄の風邪は完全に治ったみたいだ。

四、優しい兄 「風邪」「鮭」「学校」(後書き)

ジャスト六百文字です！(^^)

ちよつとだらしない兄としっかり者の妹という感じです。風邪は治りかけたときに、人にうつすようですね。要注意です。

五、不幸な女 「電柱」「白桃」「眼鏡」

あたしは度のきつい眼鏡をかけると、自転車に飛び乗った。目指すはスーパー。。。いざ、出陣！

猛スピードで自転車を漕ぐ。

何故って、あの高級白桃の缶詰が一個五十円なんだから！ 白桃って缶詰の中でも高い。安売りなんて滅多にしないの。

それにそれに、あたしは白桃が大好き！

開店前のスーパーに列を作って並び、開店と同時に押し寄せるおばさん連中のパワーにもひるまず、なんとか白桃の缶詰を三個ゲットした！ もっと欲しかったんだけど、お一人様三個限りだったの……。

嬉しさと舞い上がりながら家路へ急ぐ。ペダルを踏む足に力が入る！ ぐんぐんスピードが出る。ちよつと力が入りすぎてしまったみたい……。急に路地から飛び出して来た子猫に、気付くのが遅れてしまった。あたしは避けようと、必死でハンドルを切る。

キキキーン！ ガッシャーン！

凄まじい勢いで、あたしは電柱に激突した。怪我をしなかったのが奇跡みたい。けど……自転車のハンドルは曲がり、あたしの眼鏡は無惨にも砕けた……。

あたしは泣きそうになりながら、曲がった自転車を押し、ぼやけた視界でどうにか家に辿り着いた。でも、あたしには白桃の缶詰があるから！ 白桃を食べられたら幸せよ。

しかし……その幸せは無惨にもうち砕かれてしまった。あたしは当分白桃の缶詰を食べることが出来ない。その缶詰はパツカンじゃなかった。あたしの家には缶切りがない。

眼鏡も自転車も使い物にならないし……あたしは絶句し、声をあ

げて泣きじゃくった。

五、不幸な女 「電柱」「白桃」「眼鏡」（後書き）

六百文字にちょっと足りなかったので、少し書き直して長くしました。 ^ ^ ;

彼女は悲惨な目にありましたね…こつこつ目にはあいたくないです。

六、やきもち 「広辞苑」「ドア」「猫」

——あー、いたいた。また夢中になって広辞苑を読んでる。

わたしはドアの隙間に手をかけて、そーと彼の部屋に入っていく。仕事熱心なのはいいけど、熱中しちゃうといつもわたしのこと忘れちゃうんだから。

彼は作家。今もパソコンの前に座り、必死で広辞苑をめくっている。ネット検索すればいいのに、やっぱり広辞苑がいいんだって。

わたしは甘えた声を出して、彼の膝に手を伸ばす。

「あ、ミーコ……やばい、朝ご飯まだだったな。昨日は徹夜で書いてたからさ……」

彼は眠そうに欠伸する。新米作家さんは色々大変でしょうけど、わたしのご飯は忘れないでね。

「ミャー！」

黒猫のわたしは、ちょっと膨れて彼の広辞苑の上に飛び乗る。ご飯をくれるまで、見せてあげない！

あとがき

これは一番短い、たった三百九文字の作品でした……。後書きで字数を増やします。

交流掲示板では、タイトルはつけてませんので、今回一話一話タイトルをつけてみました。後でタイトルをつけるっていうのも楽しいですね。掲示板に書き込む時は、だいたいのあらすじを頭の中でイメージし、直接書き込んでいます。まさに、即興ですね。書いた後、読み直したりはしますが、ほとんど思いつきで書いてます。

三つのお題から色んなイメージが膨らんで楽しいです。このストーリーは、なんとなく猫がドアに手をかけて部屋に入ってくるシーンが頭に浮かんできました。猫は器用なんで、大抵のドアは開けますよね。足音もなく忍び寄ってくるという感じです。

六、やきもち 「広辞苑」「ドア」「猫」(後書き)

ショートショートパート1最後の作品です。パート1ということでも
またパート2も書いてみようと思ってます。(^^)

読んで下さってありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5919b/>

ショートショート パート1

2010年10月21日23時57分発行